

南四国の海洋性観光の地理学的研究

泥谷 智明

1. はじめに

わが国の経済は、第2次世界大戦後の朝鮮戦争や国民所得倍増計画の成功を契機にして息を吹き返し、特に昭和30年代に入ってから、高度経済成長と軌を一にして観光の発展は著しくなった。各地で観光地化がすすみ、そのスケールは大きくなって地域経済的にも国民経済の上からも無視できない状況となり、こうした観光現象を地域的に分析し、説明しようとする観光地理学の研究が増加することとなった。それらの研究成果をまとめると1. 大都市圏における観光地の立地、空間構造を明らかにしたもの、2. 個別観光地の形成、機能、構造を追求したインテンシブな地域研究、3. 観光資源、観光施設や観光客流動など特定の観光現象も外の観光地域研究もこれに付加されよう。

個別観光地の事例研究については多くの成果があり、従来の研究にみられたような観光地をもつ行政当局がまとめた観光施設、観光客などの資料分析だけではなく、地域形成者の性格分析を通じて観光地域を動態的に把握する実証的研究法が導入され、観光地理学が大きく前進した。

野本は妙高・赤倉温泉を事例とし、小池は外来資本による白浜開発を研究した。山村は伝統的温泉地である伊香保と新興温泉地である鬼怒川を事例に、温泉興落の形成と機能、構造の変化を動態的に研究する中で、観光資本の性格の違いやその変質に注目した。その中で、経済的機能、観光客の特性を把握し、温泉権や土地所有関係など集落の社会経済構造に規定された地域社会の開発姿勢こそが、両温泉地の地域的格差を生み出したと指摘した。

このように日本観光においては、温泉観光地では一般的に宿泊機能を有しており、宿泊業が集中していて、観光客も通年化しているケースが多い。その場合においては、土産店や飲食店など観光関連産業も著しい発展をとげ、その地域のサービス業も波及効果を受け発展している。

しかし、海水浴などの海洋性観光地は、観光客の夏季への偏在が著しく、観光としては日帰り観光として色彩が濃い。高知県全域、徳島県の阿南地域、愛媛県の南予地方を中心とした地域は全国的にも海洋性の自然環境が卓越しており、特に太平洋を中心とした海洋性資源は観光の面からも注目される。

また、昭和63年に瀬戸大橋（児島～坂出）が開通し、四国は本州と陸続きとなり観光だけでなく地域経済に与えた波及効果は大きなものがあつた。その後、全国的に高速道路網が整備され、全国各地が高速道路で結ばれることになった。そのことにより各地域との時間短縮がなされ、行動範囲が拡大している。これは、観光の広域化を促進するに至っている。また瀬戸中央自動車道（児島～坂出）に続き、平成10年には本州・四国連絡道路（明石～鳴門）が、平成11年には西瀬戸自動車道（尾道～今治）が開通する。四国地域において観光の広域化とともに、各産業に波及効果が期待される。

2. 南四国の地域的特徴

南四国は高知県を中心として四国の南部に位置し、南は太平洋に直面している。徳島・愛媛両県との境界は海岸の狭い低地と、吉野川・仁淀川などの谷とを除くと、険しい四国山地の分水界に当たるため、他地域との若干改善されただけで瀬戸内海沿岸の香川・愛媛両県や阪神地域に近い徳島県北部と比較すると地理的にも不利である。

大都市との関係的位置では、大阪・神戸に最も近く、大阪市と高知市との直線距離は約

220kmで、名古屋からは約 350km、東京からは約 650kmである。南四国は日本歴史の流れからみても、ほとんどつねに中央の文化地域から遠く離れ、現在でも関東・東海・近畿中央部・瀬戸内・北九州と連なる日本の政治・経済・文化の中核地域、つまり太平洋ベルトからはずれており、その裏側の位置にある。この恵まれない位置的環境に、さらに北部に横たわる四国山地という地理的障害が重なって、他地方との交通連結を不便にし、南四国に独特な性格をつくり出させる結果となっていた。そして国土開発においても、国土開発軸から大きくはずれていた。後の第 2国土軸構想からもはずれ、経済的に全国的に遅れた地域となった。

以前から漁業が盛んな地域であったが、漁業の衰退は地域経済を圧迫し、過疎化を進行させる結果となった。漁業形態も、遠洋・沖合漁業などから育てる漁業である養殖漁業へと変化した。

南四国の恵まれている点は、太平洋に面しており温暖な気候であり、黒潮によって運ばれる海の幸は最高である。特に、海洋性観光資源は全国的にみても優れており、釣り、サーフィン、海水浴などあらゆる海洋性観光を楽しむことができる。しかし、先にも述べたように交通条件等が劣っており、全国的な視野で注目されるまでではなかった。全国津々浦々に高速道路が整備されたことによって、大都市から比較的遠隔地にある観光地にも遠方からの客が増加し始めた。高知～米子が高速道路で結ばれたことは、太平洋と日本海が短時間で結ばれたことを示している（図 1参照）。同時に、今までは交流の少なかった山陰地方などからの観光客も増加している。高速道路網の整備は観光だけでなく、経済全体の交流が広域化するに至っている。全国各地に高速道路が延伸することにより、時間的距離の短縮に成功している。これは、南四国の地域的特徴のデメリットを是正するものである。

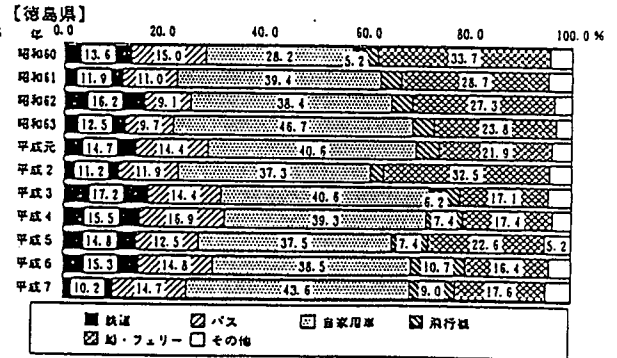
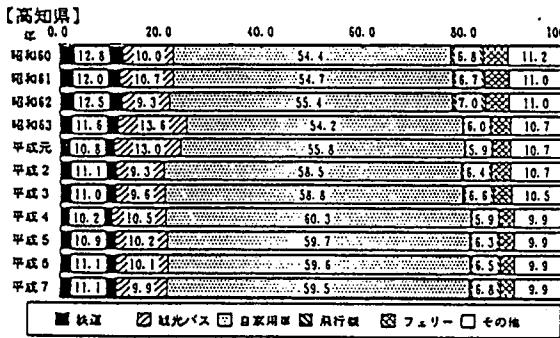
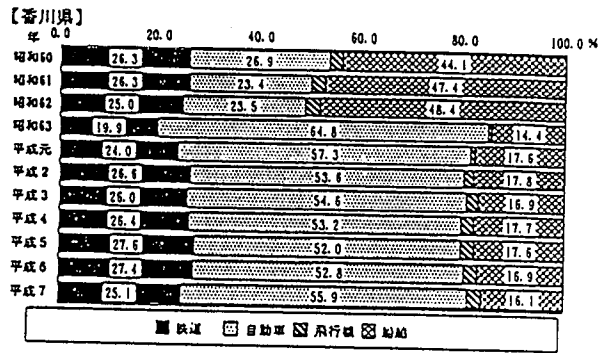
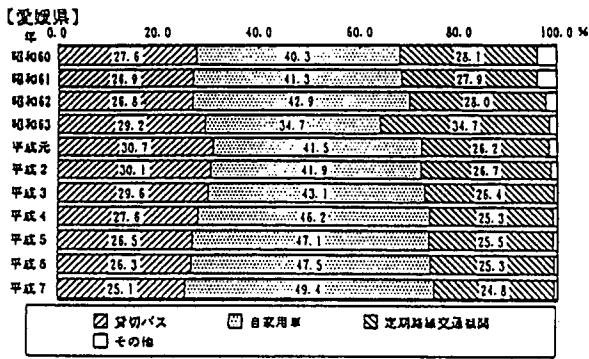
3. 日本の観光の現状

南四国はここ数年、観光客数については伸び悩み傾向がみられたが、観光客数、入込数にも明るい兆しが見え始めたといえる。1997年 3月には中国横断自動車道が全線開通したことにより、山陰地方との時間短縮に成功した。また、四国各県の観光客利用交通機関の推移をみると、香川県は昭和63年の瀬戸大橋開通時には、自動車を利用した観光客の割合が前年の23.5%から一気に64.8%と大きな伸びを示しているが、その後現象を続け50%前半に低迷している（図 2参照）。原因としては観光施設、観光資源のマンネリ化が考えられる。徳島県は大きな変化はないが、愛媛・高知の両県は徐々に自家用車の割合が増加している。特に高知県は、他の交通機関が未発達のため自家用車が、観光に占める割合が他の 3県よりも断然多く、道路網の整備が南四国観光発展の鍵を握っていることを示している。

また、日本の第 2次世界大戦後の観光についてまとめると、山村(1996)は、

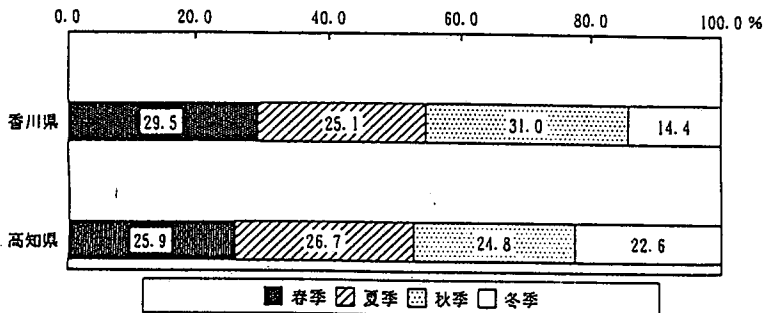
1. 昭和20年代末までの戦後復興期
2. 昭和30年代から40年代末までの高度経済成長期
3. 昭和50年代以後の安定成長期

に大別され把握することができようとして述べている。高度経済成長期には大型社会資本の投下とそれに伴う民間資本とを大都市とその周辺に集中させ、この時期は太平洋ベルト沿いに人口増加がはかられた。そして地方では拠点となる地方都市が発達していき、人口増加をみせたのである。しかし、南四国においては地理的・経済的条件のために観光が盛んになったのは、竜串が日本初の海中公園指定を受けた昭和40年代後半であると考えられる。当初足摺観光は四国遍路という側面から観光が成立してきた。昭和45年の竜串の海中公園指定によって、四国遍路・自然見物から海洋性自然見物型に変化していった。



出典：各県観光担当課資料

図2 昭和60～平成7年の各県別県外入込観光客利用交通機関の推移



出典：各県観光担当課資料

図3 香川県・高知県観光入込客四季別構成（平成7年）

現在においては高速道路網の発達で観光活動は広域化する傾向がみられる。しかし、時間距離の短縮は観光活動において日帰り観光を立地させる結果になっている。また日本各地の過疎地域が観光産業をはじめとして地域活性化を目指している。このような動きの中で、四国以外の観光地でも観光開発が行われ、道路交通網が整備されたことが各観光地の競争を激化させることになり、観光地同志の競争も広域化するに至っている。よって南四国の観光も本州を意識して展開されなければならない。

4. 南四国の観光の現状

時代潮流が変化する中で、ただ風景を見るだけでなく、体を動かそうとするなど観光行動にも変化が生じている。名所・旧跡を足早にまわるのではなく、一カ所に落ち着いてキャンプ、海水浴、スキューバダイビング、サーフィンなどを楽しむ観光も盛んになってきている。海洋性観光においても新しい志向が生まれてきている。またそれを、体験学習型修学旅行観光として取り入れている地域が、南四国である。近年、自然環境と親しむ機会が減少した都市で育った若者達にとっても、このような修学旅行は教育的意義も大きいのである。

そしてその中で、南四国の海洋性観光においては、景色を楽しむ名所・旧跡型観光やキャンプ・海水浴やホエールウォッチングなどの体験型観光などそれぞれの特色を生かして様々な観光資源を組み合わせるようになってきた。これは、一人ひとりの個人が自分自身でテーマをもって観光活動が行われるようになり、それに見合う観光施設が各地に建設されるようになったことによるのである。観光ブームの変化が生じているということが言えるのである。

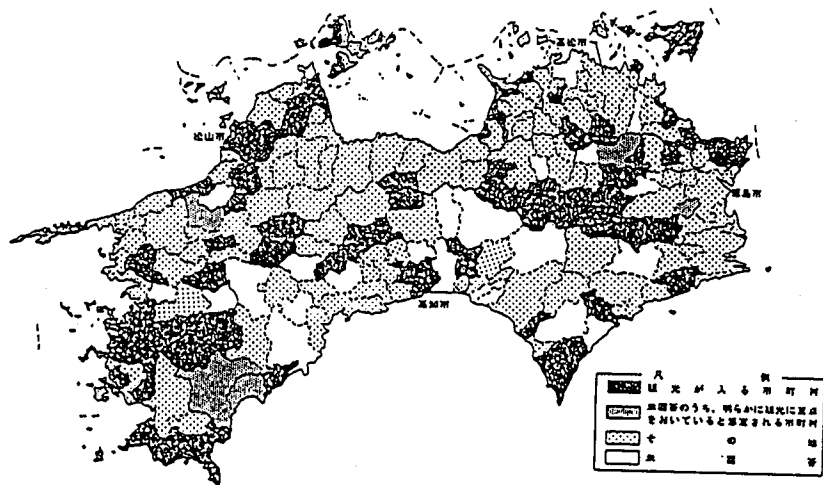
また居住する地域によっても観光のスタイルが異なり、近畿からの観光客は四国での観光活動を、夏季は体験型観光を中心とした広域観光を楽しんでいる。冬季は太平洋の海洋性観光よりも名所・旧跡を訪問する観光が主流となり、夏季ほどの広範囲での活動は見られない。この観光スタイルが充実していくことにより、観光客は通年化する傾向がみられる(図3参照)。特に、香川県と高知県を比較すると近年その傾向がみられる。このように、それぞれの観光資源の特色をうまく生かすことが大事である。

そういった中で観光地側も個々の特性について認識し、ターゲットを意識して個性あふれる観光地づくりを展開していかなければならない。高知県幡多地域における体験学習型修学旅行観光は、足摺岬の断崖や亜熱帯植物、椿などの自然や風景、第38番札所・金剛福寺などの名所・旧跡型観光、竜串の海洋性資源を利用した「見る観光」、大月町のエコロジーキャンプ場でなされる海洋性資源の中で自分自身の体を動かすことによって観光活動を満足させる「する観光」、中村市での四万十川での川下りや大方町でのホエールウォッチングなどの「体験型観光」など行政当局が地域内で交流することや観光推進会議を設立したりすることによって、個々の観光資源を生かして体験学習型観光を幡多地域において実現した。また黒潮の恵みによって、かつおなどの魚資源もこの地域の観光の目玉であり全国各地から皿鉢料理を求めて観光客がやって来る。このように地域社会や行政当局が一体となって活動することは、その地域を観光地化するという視点から重要である。

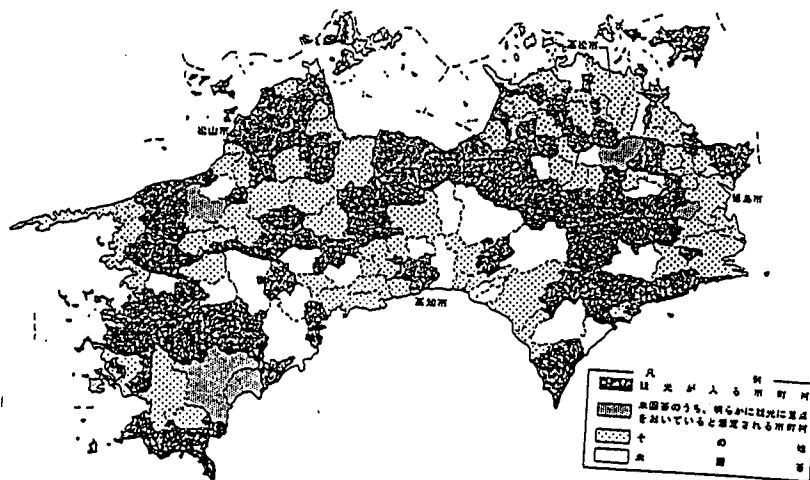
5. 今後の課題

愛媛県南予地域は、四国地域で最も交通が不便な地域である。宿泊施設が充実しておらず、観光産業の充実が図られていない。この地域は四国最大都市であり、道後温泉がある観光都市・松山と四国最南端の観光地・足摺岬との中間に位置する。道路交通網を整備することによって、より一層の時間短縮が実現されることにより、南予地域にも観光客が足を運ぶようになると考えられる。宿泊施設の整備など松山～南予～足摺という観光ルート

(現状)



(将来)



出典：高知県文化環境部観光振興課資料

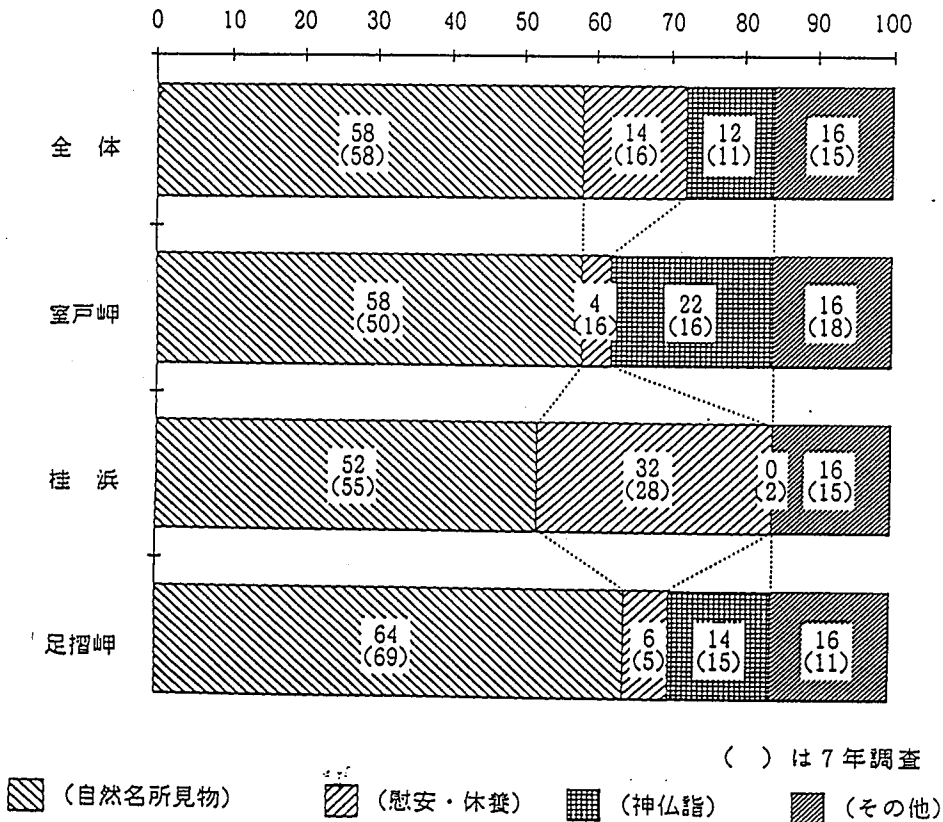
図 4 観光・レクリエーション型志向の市町村

の確立を図っていくことを望のである。

幡多地域は四国最南端に位置し、交通が不便な地域ではあるが、海洋性観光資源は充実して釣りダイビング、サーフィン、キャンプ、海水浴などの体験型観光と太平洋の美しい特徴的な風景を楽しむ周遊型観光の共存を図りながら、発展していくことを望む。また観光の広域化を図っていく面においては、松山地域との連携を通して、温泉観光と海洋性観光のルートを形成していくことが必要である。

室戸地域においては北隣に位置する徳島県の阿南地域との連携が出来ていない。阿南地域は各市町村間で観光に対する協力体勢が出来ている（図4参照）。高知県内において、観光・レクリエーション志向の市町村は、高知市より東部に固まっている。南四国全体でみると、南予、幡多、高知市、阿南と観光・レクリエーション志向の市町村があるが、空白地帯となっているのが高知市から室戸市に至る地域である。南四国の海洋性観光の発展は、南四国全体で取り組みがなされなければならない。また室戸市は四国遍路から観光が発展した地域であり、現在もその傾向がみられる（図5参照）。しかし近年、新たな観光開発の試みがなされている。もう一つ、室戸地域は宿泊者収容能力が劣っており、宿泊観光地としては成り立っていない。阿南地域との広域化観光を模索しつつ、観光客入込のためには宿泊施設の整備が必要である。

阿南地域は、本州・四国連絡道路（明石～鳴門）が開通することにより関西方面からの観光客の入込に期待されるが、その道路から接続する高速道路が未開通であるため、早期の開通が望まれる。徳島県内も徐々に高速道路が開通しているが、その開通状況は吉野川沿いに内陸に向かっており、今後の観光客の流動は徳島市から瀬戸内海沿岸や高知市への観光アクセスが予測される。よって、室戸・阿南方面への観光客が流れてくるような観光地づくりが望まれるのである。



出典：高知県文化環境部観光振興課資料

図5 高知県観光における旅行目的の割合 (%)